

はしがき

日本に居住する外国人の増加とともに、これまで日本国内ではほとんど、あるいはまったく見かけることのなかったような宗教の施設も、あちこちで目につくようになってきた。グローバル化の進行とともに、日常生活において宗教の違いを強く意識せざるを得ないような場面が日本においても目立ってきた。そういう変化が生じたことについての認識も一般に少しずつ深まりつつある。

宗教や宗教文化の違いがもたらす誤解や勘違いの類は、テレビやネット上などでは面白おかしく取り上げられることがあるが、適切な理解のための基礎作業は欠かせない。何よりも誤解の増幅だけは避けなければならない。そのためには、現状をできる限り正確に把握することが必要になる。

2015年9月に国連で開かれたサミットで、SDGs（持続可能な開発目標）という指針が示された。開発（development）という言葉が用いられていることから分かるように、そこでの中心的関心は経済発展である。しかし持続可能な経済の発展は、その基盤に人間同士の信頼や相手を理解しようとする姿勢が備わっていなければ望ましい道筋には向かわない。相互の信頼や理解を深めようとするなら、異なった宗教や宗教文化を理解しようとする姿勢もまた必須になる。これは果てしない道のりではあるが、そのときどきにおいて、まず現状をできるだけ正確に把握するという作業は、もっとも基礎的な部分に位置する。宗教情報リサーチセンターにおける宗教情報の収集とその分析は、こうした基礎作業に与するものと考えている。本書を編集した背景には、そうした当センターの開所当初からの目的と理念がある。

日本に広がっている「外来の宗教」という表現を使ったが、それらの中には、「隣人の宗教」となるものもある。これまでの日本の伝統的宗教とは異なった空間に存するわけではない。やがて時間をかけて新しい日本の宗教文化の一角になっていくものもあろう。そういう観点から、本書で示された事例と向かい合っていたらと思う。次々と到来する宗教についての研究は、これから広く展開していく課題である。本書はその一つの準備作業とも考えている。

編集責任者
井上順孝